

著：斎田 俊明

皮膚病理組織診断学入門

改訂第3版

書評者：山本 明美(旭川医科大学教授・皮膚科学)

皮膚病理組織学についての教科書はこれまでもいくつか出版されていますが、他書にない本書の一番大きな特徴は、診断名が本文の中でアルファベット順に並んでいることです。他書では疾患は炎症性疾患、代謝異常症、腫瘍などのように疾患群ごとにまとめて記載されています。したがって、ある疾患の病理組織像について調べようと思ったら、まずは巻末にある索引を見てその疾患が載っているページを調べ、そして本文のそのページを開くという作業をしないで済みます。しかも巻末の索引には通常複数のページの番号が記載されていることが多く、一体どのページに行けばその疾患の特徴が最も詳しく記載されているのかは、ページを開いてみるまでわからないということがしばしばありました。その点で本書は最初から疾患名がアルファベット順に並んでいるので、ワンステップで直接知りたい病気にたどり着くことができます。これは忙しい臨床家にとって非常にありがたいことです。

従来の疾患群ごとに記載する教科書では似たような疾患が前後に記載されているので、鑑別疾患を考えるとときにそのチャプターの中を探することで最終診断にたどり着くことができるという利点がありました。しかしこの点について

は、本書では各々の疾患の解説の中に組織学的鑑別診断が参照ページとともに記載されているので心配はありません。加えて巻末にはもちろん索引も付いています。

また従来のタイプの教科書の利点としては、系統的に皮膚病理組織学を学びたいという読者にとっては、たとえば「よし今日はメラノーマとその関連疾患について勉強しよう」と思ったら、色素性腫瘍のチャプターを最初から読んでいくことでその疾患群に属する疾患のそれぞれの特徴を知ることができるという利点がありました。しかし本書では関連する疾患があちこちに分散しているために、Spitz 母斑なら 229 ページ、悪性黒色種なら 156 ページというようにそれぞれ離れたページを参照する必要があります。しかしながら、実際のところ色素性腫瘍を系統的、網羅的に勉強しようという若手皮膚科医は実は少数派なのではないかと筆者は考えます。むしろ、外来や病棟で経験した症例の病理組織像を勉強し、そこからそれに類似した、あるいは関連する疾患を対比させながら覚えるという実践的な勉強をしている皮膚科医の方が圧倒的に多いように思います。したがって、そういう読者にとってこの教科書は非常に使い勝手がよいと思われます。

また本書の二つ目の大きな特徴

としては、図の中に直接所見が文字で記載され、矢印でその所見の場所が正確に示されていることです。これは病理組織写真の一部に文字が被ってしまうというデメリットでもあるわけですが、そのデメリットを差し引いてもなお、解説が図の中に明示されているということは初学者にとって非常にありがたいことだと思います。

またさらなる特徴の一つとしては、各疾患の冒頭にその臨床所見が短い文章で簡潔に示され、しかも厳選された典型的な臨床写真も掲載されていることです。このことによって、病理組織学的な特徴がどのように肉眼所見に反映されているのか視覚的に関連付けられやすいという大きな利点につながっています。本書ではどの疾患も典型的な臨床写真と病理写真が厳選されて掲載されています。どの疾患も 1 ページ、あるいは見開き 2 ページの中に収まるように、しかも重要な所見が漏らさず記載されており、まさしく皮膚病理学の入門編としていつもそばに置いておきたい一冊となっています。

● A4判 頁302 2017年11月
定価：本体 18,000 円＋税
[ISBN978-4-524-25878-9]
南江堂刊